

C. C. アヴェリンツェフの仕事—— ビザンツの文明史的な位置づけと『初期ビザンツ文学の詩学』 (モスクワ, 1977) ¹

三浦清美

1. ソビエト、ロシアのビザンツ学者、セルゲイ・アヴェリンツェフとは

1453年にビザンツ帝国は滅んだが、ビザンツを継承した国家はと言えば、やはりロシアということになるだろう。15世紀末にモスクワ大公イワン3世が、ビザンツ帝国最後の皇帝コンスタンティノス12世の姪のゾヤを娶り、ビザンツ帝国の継承者であることを自認したことはあまりにも有名だ。しかしながら、日本のビザンツ研究は、ロシア人がビザンツをどう見たのかという視点を欠いているように思われる。このことは、研究がビザンツを冷たく突き放す傾向のある西欧の視点からのみ行われていて、ビザンツ文明に内在的な共感をもつロシアを中心としたスラヴ諸国の視点が弱いということを意味しているように思われる。

もちろん、ビザンツ帝国とモスクワ大公国、のちのロシアとのあいだに、どんな連続性があり、どんな断絶があるのかは面白いが、しかし非常に難しい問題であることも事実である。しかしながら、その後継者であるロシアがビザンツ帝国とその文化をどう捉えているのかという視点が弱いことは残念なことには違いない。ロシアには錚々たるビザンツ学者も多いが、西欧の視点を相対化するためにも、ロシアのビザンツ研究の空気感を知ることが大切なことなのではないかと思う。そのようなわけで、本稿では、ソビエト時代後半から新生ロシア時代にロシアのビザンツ研究に不朽の功績を残したセルゲイ・セルゲーヴィチ・アヴェリンツェフという学者の仕事を紹介したいと思う。

モスクワならびに全ルーシ総主教キリルによって編纂された『正教事典』²によれば、セルゲイ・アヴェリンツェフはまずは文献学者であり、キリスト教文化史家、文学研究者、詩人であった。ロシアテレビのルポルタージュ³によれば、モスクワのダニーロフ墓地に

¹ 本稿は、第18回ビザンツ学会(2021年3月29日オンライン開催)での同タイトルの報告を、若干の修正とともに論文のかたちにしたものである。

² Аверинцев // Православная энциклопедия. [<https://www.pravenc.ru/text/62704.html>] (2022年2月27日閲覧).

³ Сергей Аверинцев. Чтец, философ, мыслитель. [<https://smotrim.ru/article/1001099>] (2021年6月5日閲覧).

葬られたこの大学者の墓碑銘には、「Чтец 読書人」という一語が刻まれているようである。アヴェリンツェフという学者の在り方を定義するのに、この「読書人」という言葉ほどふさわしいものはない。アヴェリンツェフは、ヨーロッパの古典古代、中世のみならず、19世紀ヨーロッパのロマン主義、20世紀初頭ロシアのいわゆる「銀の時代」の文学、さらには中近東地域の文学の繊細な読み手であり（この場合、文学というのはもっぱら詩である。散文はあまり好きではなかったと彼の妻は証言している）、これらの文学を原語で読み、精密なロシア語に訳した翻訳の達人でもあった。

アヴェリンツェフの経歴を簡単に振り返る。病弱だった子供時代から文学に親しんだセルゲイ・アヴェリンツェフは、1961年にモスクワ大学文学部古典文献学講座を卒業した。卒業論文は「プルタルコスの伝記構築の諸原理」であった。その後、モスクワ大学文学部の大学院に進学し、1967年に論文「プルタルコスと古典古代の伝記—ジャンルの歴史におけるジャンルの古典の位置について」で準博士号（欧米の Ph.D に相当）を取得し、1971年からロシア科学アカデミー・ゴーリキイ名称世界文学研究所の上級研究員を務めた。1979年に、「初期ビザンツ文学の詩学」で正博士号を取得し、1987年にはロシア科学アカデミーの準会員となり、1991年にモスクワ大学哲学部世界文化の歴史と理論講座の教授に移るが、1994年にソ連崩壊後の混乱を避けてウィーンに居住の場所を移し、ウィーン大学スラヴ学研究所の教授となった。2003年5月にロシア科学アカデミーの正会員になるが、時を前後して、心筋梗塞の発作に襲われ、10か月の昏睡ののちに2004年2月にウィーンで没した。

本稿は、アヴェリンツェフの正博士論文で、彼の代表作でもある『初期ビザンツ文学の詩学』のなかから、「謎かけと謎解きとしての世界」のパノポリスのノンノスについて扱った箇所を取りあげて、彼がビザンツ文明の特性をどう捉えているかを中心に見ていきたいと思う。

2. 『初期ビザンツ文学の詩学』の射程とする時代

『初期ビザンツ文学の詩学』という著書が射程とする時代は、ビザンツ帝国が小アジア半島、バルカン半島に限定される以前の時代、シリア、エジプトが版図のなかにあり、首都コンスタンティノーブルの動向に無視しがたい影響力をもっていた時代である。その時代について、アヴェリンツェフは「序文」⁴において、次のように述べている。

乱暴な言い方をすれば、「初期ビザンツ」という言葉が使われるさい、私たちはそれがコンス

⁴ *Аверинцев С.С. Поэтика ранневизантийской литературы.* СПб., 2004. С. 7-15.

タンティノス1世帝（在位 324-337）からイラクリオス帝（610-641）までの時代であると理解している。コンスタンティノス1世の時代に、この時代まで敵対し合っていた、皇帝権力とキリスト教信仰の同盟が史上初めて締結され、その総体においてビザンツ性のおもて面の輪郭を規定した。この同盟のもとで、ボスフォラスの両岸における首都、コンスタンティノーブルに改宗させられたビザンティウムの町の千年にわたる歴史がはじまったのである。[中略] イラクリオス帝の時代に、この国家はローマの太古からの敵であったササン朝イランに輝かしい最後の勝利を収めたあと、聞いたこともなかった新しい敵であるアラブ人によって決定的な敗北を喫し、アレクサンドリアとアンティオキアとお別れすることになった。[中略] エジプト、シリア、パレスチナはイスラーム世界に去った。帝国は困難な政治的、経済的、文化的危機に突入し、この危機から抜け出たとき、新しい問題と新しい可能性をもつ別の国家となっていた。古代から中世への移行が完成したのである。

アヴェリンツェフが「初期ビザンツ」と呼ぶのは、ローマ帝国の西半分と関係が断たれているが、近東地域とは一つながりであった時代であり、アヴェリンツェフはジョルジュ・フィンレイについて言及しながら、むしろ「原（プロト・）ビザンツ」あるいは「前ビザンツ」と呼ぶほうがふさわしいかもしれないと述べている。それから、イラクリオス帝を終わりの起源とすることには何の疑問もないものの、始まりについては数十年に限定してその境界を指し示すことが難しいと断っている。

宗教政策の革命、帝国の首都の移転は、非常に明瞭な道標ではあるものの、これらの道標は決して、それらによって表現された、社会生活と文化生活の深い断層と時間のうえで一致しない。（パタラの一訳注）メトディオス（3世紀後半）のような作家はコンスタンティノス以前の時代に生きたのであるが、しかしながら、彼の著作は[中略]初期ビザンツ文学の絵のなかに溶け込んでいくものである。逆に、リバニオス（314-393）のような作家はコンスタンティノス以降に生きたが、しかしながら、彼の著作を古典古代の文学の歴史から除外することはどうしてもできない。一つの時代から次の時代への移行は、非常にゆっくりと行われており、多くの矛盾を含むプロセスである。

安易な図式化を拒む峻厳な態度はいかにもアヴェリンツェフらしいと言えるもので、それは文学作品の繊細な読みに立脚したものであることが窺われるが、アヴェリンツェフ自身は自らの立場を次のように述べている。これはこの書の立ち位置のマニフェストと呼んでよいだろう。

この本で検討するテキストは、それがたとえば、ナジアンゾスのグレゴリオスであろうと、

パノポリスのノンノスであろうと、後期古典古代の文学であると見なして一向に差し支えない。しかし、これらのテキストにおいて、私たちがまず第一に探し求めてきたものは、古きものこのままでなく、新しきものの諸特徴である。私たちを惹きつけてやまないのは、何世紀にもわたり彫琢された情性の調和ではなく、多産な不調和の断層である。この意味において、「古典古代後期」文学の詩学なのではなく、まさに「初期ビザンツ」文学の詩学なのである。

アヴェリンツェフの諸著作において、ビザンツ文化を、ギリシア文化と、(ユダヤを含む)近東の文化のアマルガム、あるいはカクテルであると捉える態度は一貫しているのであるが、これが如実に現れた例として私たちの関心を引くのが、「謎かけと謎解きとしての世界」の章でアヴェリンツェフが取りあげている5世紀の詩人、パノポリスのノンノスによる「パラフラシス」と呼ばれるジャンルの詩作品である。次にアヴェリンツェフが、『ヨハネによる福音書』に基づく「パラフラシス」をどう分析しているかを見てみることにしよう。

3. パノポリスのノンノスにおけるギリシアとユダヤの邂逅

アヴェリンツェフは、パノポリスのノンノスが活躍した文学ジャンルである「パラフラシス」について次のように紹介している。⁵

古典古代から中世に移行する時期の『パラフラシス』と『メタフラシス』の文学のなかで、特別な役割をしてきたのは、聖書の素材に古典古代の形式を適用することに基礎を置く諸実験である。この諸実験というのは、東方においてはホメーロスの言語と脚韻で、西方においてはヴェルギリウスの言語と脚韻で旧約聖書ならびに新約聖書を語りなおす体のものであった。

要するにこれは、福音書をはじめとする聖書のエピソードを、英雄叙事詩の形式、ギリシア語のホメーロス、ラテン語のヴェルギリウスの詩形、つまり、6歩格のダクテュロスで歌い上げてゆくものである。アヴェリンツェフは分析の対象として、『ヨハネによる福音書』に基づく「パラフラシス」から、イエスの十字架上の死の場面を引用している。引用はアヴェリンツェフによってギリシア語から現代ロシア語に翻訳されたものだが、それを本稿の筆者が現代ロシア語から日本語に翻訳したものを次に掲げる。

このときイエスは、避けがたい偉業の順序を

⁵ Там же. С. 150-155.

己が心のなかに捉え、何が実現されずに残っているかを
知りながら、終わりを急ぎ、まえにいる群衆たちにつぶやいた。
「私は渴く」と。すでに近くに茶碗が用意されていた。
苦い酢に満たされた茶碗が。誰かが、狂乱した霊をもって
底なしの海で、誰も到達できない深淵で育った海綿を取り
苦しみをもたらす液体をたっぷり含ませ、それから
棒の切っ先に固定したのち、高く差し上げた。
このようにこの男は主の唇に死の苦みを近づけ
主の御顔の真ん前に影長き竿のうえで宙高く
海綿を揺らしながら、口に液体を流しこんだ。だが、それは
命をもたらす水、腐ることない神の食べ物ではなかった。
かくして、唇を探り当て、喉に液体を流しこんだのだった。
全身人事不省となりながら、かの人は最後の言葉を言った。「事は成った。」
そして、頭を垂れ、自ら選んだ最期に身を委ねたもうた。

参考のために、この部分に対応する新約聖書（新共同訳）の該当部分（『ヨハネによる福音書』19章28-30節）を引用する。

こののち、イエスは、すべてのことが今や成し遂げられたのを知り、「渴く」と言われた。こうして、聖書の言葉が実現した。そこには、酸いぶどう酒を満たした器が置いてあった。人々は、このぶどう酒をいっぱい含ませた海綿をヒソブにつけ、イエスの口もとに差し出した。イエスは、このぶどう酒を受け取ると、「成し遂げられた」と言い、頭を垂れて息を引き取られた。

福音書は簡潔すぎるほどの簡潔さでイエスの受難のありさまを淡々と叙述するのに対して、パラフラシスはしつこいほどの装飾で文章を飾り立てているという印象を受ける。両者のあいだでは、共通するものとして挙げられるのは、以下の3点だけだ。それは、「渴く」、「成し遂げられた」というイエスの言葉であり、瀕死のイエスに与えられる酸っぱい飲み物「酸いぶどう酒」あるいは「酢」の存在であり、この飲み物を「海綿」に含ませてイエスに飲ませたというディテールである。共通するのはこの3点だけだが、福音書になくパラフラシスにあるものはたくさんある。それは以下の5点である。

まず第1点目として、イエスの心のなか、その心象風景とも言うべきものが挙げられる。イエスは、偉業の順番を思い浮かべ、何が残っているかを確認したのち、終わりを急ぎ、共通の部分「私は渴く」という発話に到る。このイエスの心象風景は、やがて来る共通部分のイエスの言葉「成し遂げられた」の伏線になっている。第2点目として、「酢」がさま

さまざまな提喩で言い換えられている。たとえば、「酔」は、「苦しみをもたらす液体」,「死の苦しみ」と言い換えられ、否定表現として、「命をもたらす水」ではない、「腐ることのない神の食べ物」ではないとなっている。この否定表現も「酔」の提喩と考えてよいだろう。さらに第3点目として、海綿についての奇妙なディテール「底なしの海で、誰も到達できない深淵で育った」が挙げられる。この海綿についてのディテールについては、アヴェリンツェフが特別に注意を払っているので、あとで見ることにしよう。第4点目として、海綿を差し上げる者のディテール「狂乱した霊をもって」「棒の切っ先に固定したのち、高く差し上げた」「主の御顔の真ん前に影長き竿のうえで宙高く」「唇を探り当て」「喉に液体を流しこんだ」が、そして第5点目として、瀕死のイエスのありさまのディテール「全身人事不省になりながら」が挙げられる。

4. アウエルバッハ『ミメーシス』第1章「オデュッセウスの傷痕」に見るギリシアとユダヤの相克

ここまでで紹介してきたノンノスのパラフラシスという文学現象はどう考えたらよいのだろうか。ここで本稿の筆者は、ドイツの文芸学者アウエルバッハの主著『ミメーシス』から引用して、一本の補助線を引いておきたいと思う。アウエルバッハは、『ミメーシス』第1章「オデュッセウスの傷痕」で、ホメーロスの文体と『創世記』の文体を比較しているが、これはそのまま、ギリシアとユダヤの世界把握の在り方の違いに対する鋭い文明批評になっているように思われる。

このように見てくると、これら古代の二つの叙事詩（ホメーロスと『創世記』一訳注）ほど文体が対照なものは、ほかに想像しがたいようである。一方（ホメーロス）は、十分に形象化され、時間と場所は明示され、前景で緊密に結び合い、均一に照明をあたえられた現象である。そこでは思考も感情も明白に表現され、あらゆる出来事はほとんど緊迫感をともなわずに悠長に進展する。

これに反してもう一方（『創世記』）は、物語の目的に必要な限られた範囲の現象の描出であって、これ以外の一切は明らかにされない。ここでは物語の展開上の決定的な瞬間のみが強調され、それにいたるまでの経過は存在を無視されている。[中略] ここではすべてが、間断のない極度の緊迫感のもとで、一つの目的を目指しつつ、そのかぎりでははるかに統一的だが、依然として謎めいたまま背景をそなえているのである。

筆者なりにパラフレーズしてみると、以下のようなになる。ギリシア的な世界把握にあつては、見えることがすべてなのである。存在するものはすべて見えるものでなくてはなら

ないという衝動に駆り立てられている。すべては、アヴェリンツェフの章立ての言葉で言うと、「謎解き」の位相で語られているのである。一方で、ユダヤ的な世界把握の在り方では、「神の意志」はつねに隠されていて、人間はその不確定性のなかを生きなくてはならない。見えるものとなって人間に触知されたものは、もはや価値がないのである。すべては「謎かけ」の位相で語られている。ギリシアとユダヤ、二つの世界把握の在り方は、完全に水と油のように二律背反的に対立していることになる。

ここで話を戻すと、パノポリスのノンノスにおいて、ギリシアとユダヤ、完全に相対する二つの世界把握の在り方が正面衝突したわけである。その結果、ユダヤ的な世界把握の在り方にあっては、福音書において周到に隠されてきたものが、「見る文化」であるギリシア的な世界把握の在り方に遭遇して、強烈に「可視化」、「見える化」を強いられ、さまざまな矛盾が塊となって噴出してきたのだ。それがノンノスにおける装飾過多の部分といえる。

5. ノンノスのパラフラシスに対するアヴェリンツェフの分析

ここが初期ビザンツの、すなわち、プロト・ビザンツの面白さであり、難しさであると思うが、アヴェリンツェフはこの面白さ、難しさを次のように分析している。

ノンノスにおいて、キリスト教的な「内容」がたんにギリシア的な「形態」に結合しているとは、とうてい言えない。キリスト教的な内容も、ギリシア的な形態も、相互的な敵対関係のなかで変容させられてしまったことがわかる。現代の読者がこの変容を純粹に否定的に評価することは、すなわち、ホメーロスの叙事詩的な単純素朴さ、福音書の聖書的な単純素朴さから残ったものは、しかしながら、とてもわずかであるとコメントをすることはいとも容易いことである。それは、確かにまったくその通りだからである。福音書のレアリアは、ホメーロスの言説の言い回しをまえにして不可解なものになってしまったかのようである。ホメーロスの言説の言い回しは、福音書のレアリアをまえにして、不可解なものになってしまったかのようである。一方が一方を「異化 *остранение* / *defamiliarization*」している。それぞれが同じ度合いだけ、濃密な不透過性と重苦しい物質的な不透明性を付与されている。

さらにアヴェリンツェフは、酢を含ませた海綿についてのイメージの発展について次のように述べている。

何よりも力強いものは、一般的なコンテクストから破れ出たさまざまなイメージの独立した力によって人を驚愕させる、解釈不明なよくわからない箇所である。瀕死のキリストに与えられ

た海綿に話がおよぶとき、詩人の想像力はあるがままの場面から完全に逸脱して、ほとんど最後まで「海綿」、「海」、「深淵」という言葉によって満たされてしまい、これらの言葉は思いがけず、不明瞭であるばかりか、不安を掻き立て不可解な象徴へと成長していくのである。

「神の意志」として隠されてきた「見えないもの」の「見える化」を、アヴェリンツェフは以上のように「不可解、不明瞭」と断じているわけだが、この「見える化」にあっても、「底なしの海」、「誰も到達できない深淵」のように、境界の消滅、すなわち、無限を指向していることは特筆すべきである。アヴェリンツェフはこの「不明瞭さ」、「不可解さ」に遭遇しても、初期ビザンツを決して否定的に評価していないのだ。アヴェリンツェフはこの「不明瞭さ」、「不可解さ」をあるがままに受け入れ、パノポリスのノンノスという文学現象について次のように結論づけている。

『パラフラシス』と『メタフラシス』の道、「改作」の道は、決してノンノスを折衷主義へと、和解し得ないものの和解へと導くことはなかった。むしろこの詩人は、和解し得ないものの不和解性のうえで遊んでいるのであり、それがあつた種の爆発、変容へと導かれているのである。北極と南極は、たえず場所を変えつづけている。ギリシアの「形態」は神秘的に肉体的なものになっている。福音書の「内容」は神秘的に物質的なものになっている。常に「矛盾した」、「場違いな」、「機転の効かない」ノンノスの各々の隠喩に蓄えられた緊張は、全テキスト、芸術的なものの全体に及んでいるのである。

ノンノスに見られる、初期ビザンツのこの緊張というのは、カルケドン信経の言葉を借りると、「混合も変化も分離も分割もしない」（イエス・キリストにおける「神性」と「人性」について述べたもの）相異なるものの共存ということになるのではないだろうか。こうした根本的な矛盾を共存させる世界把握の在り方が、初期ビザンツ、あるいは、プロト・ビザンツという時代に生まれてきたことと、その時代がキリスト教教義の形成、確立期であったことは無関係ではない。そこで形成されたものが、イスラーム誕生とともに、イスラームとは別の文明となって、本格的なビザンツとして発展していくことも否定しがたい事実であるように思われる。この見方によれば、イコノクラスムはビザンツというものを決定づけた重大な事件となる。そして、アヴェリンツェフのこの初期ビザンツへの敬意と関心は、西欧カトリック世界とは異なる形で独自のキリスト教文化を発展させてきたロシアから発信された、キリスト教の根っこそのものに対する自画像的考察と言うべきものになっているように思われる。

ソ連時代の反宗教政策は厳しいものがあり、レニングラードのカザン大聖堂は無神論博物館となり、幾多の著名な教会の建物が倉庫として使用されたり、少しでも宗教的な色彩

がある文献は出版が許されなかったりしたことは有名である。大多数の人々が宗教的文献にアクセスすることはほぼ不可能であった。にもかかわらず、そうしたソ連時代の困難な状況のなかでも、アヴェリンツェフのような真正のキリスト教学者が守られ、自らの学問的関心を追求できたことは驚くべきことではないだろうか。アヴェリンツェフという学者の存在は、ロシアという国とロシア文化の懐の深さを物語っているように思われる。

末尾に『初期ビザンツ文学の詩学』（モスクワ、1977）⁶ の構成を示す。総ページ数が319頁（本文は249頁）のこの著書の、章立ては以下の通りとなっている。とくに章番号はつけられていない。

「序文」

「導入」

「完成としての存在—存在としての美」

「人間の辱めと尊厳」

「宇宙の秩序と歴史の秩序」

「記号、旗、表徴」

「謎かけと謎解きとしての世界」

「学校としての世界」

「言葉と書物」

「不一致のなかの一致」

「ギリシア的『弁証法』の精神からの韻の誕生」

「結論」

⁶ *Аверинцев С.С. Поэтика ранневизантийской литературы. М., 1977; Аверинцев С.С. Поэтика ранневизантийской литературы. СПб., 2004. С. 7-301.*